

令和7年度 事業計画評価シート

新潟大学附属新潟中学校

(本年度、重点的に取り組む事柄)

今年度の研究主題 豊かに対話するコミュニティの形成を通じた生徒と教師の学びの深まり(2年次研究) 【前次研究の成果と課題を踏まえたキーワード】・コミュニティの形成に資する学びの構造化	・学びの深まりの実感・納得と省察
---	------------------

自己評価(中間評価)		自己評価(年度評価)		学校関係者評価	
A	とても順調に進んでいる	A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	順調に進んでいる	B	達成できた	B	概ね適切である
C	あまり順調に進んでいない	C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	まったく進んでいない	D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
				E	判定できない

評価項目	具体的評価項目及び指標	自己評価(中間評価)		自己評価(年度評価)		学校関係者(学校運営協議会)評価		学校関係者(学校運営協議会)評価を踏まえた改善策
		評価	達成状況、改善策	評価	達成状況	評価	意見・理由	
【義務教育を実施する学校として】 ○学力向上 ○基本的な生活習慣の確立 ○豊かで、互いに高め合える人間関係の構築	ア 基礎学力の確実な定着 モーニングテスト(MT)もしくはベーシックテスト(BT)において、8割以上が「A」評価 イ 道徳や特別活動、探究的活動の充実 研究アンケートの関連項目における肯定的評価が8割以上 ウ いじめ見逃しゼロ・撲滅に向けて、計画的な心の健康チェックを基にした教育相談を年2回以上実施及び全校指導・集会を年2回以上実施。	A	ア 9割以上が「A」評価だった。 イ 研究会での参加者アンケートはおおよそ肯定的な内容であった。特に、道徳で取り入れたP4Cの手法について参加者が実践してみたいと思えた内容・評価を集めることができた。今後、対話の強みをP4C以外や他教科の実践でも提案する必要がある。 ウ 前期同様に、心の健康チェックを年度末までに2回、教育相談に関わる事前のチェックを2回実施した。3年生においては進路相談も含め、個別にチャンス相談を実施している。3月までに、いじめ防止のための全校集会を実施し、いじめについて考える機会を設定したい。	A	ア 生徒にとってMT・BTは予定が出され、定期的に学習評価でできるため有効だったと評価してきた。しかし、教員にとっての採点・評価の負担、MT受検に対する生徒の心理的負担などが課題として挙がっていたことから、R8年度からMTを廃止し、BTの実施方法や評価方法を見直し実施することとする。 イ 道徳の授業では授業の中で継続してP4Cを取り入れた結果、生徒の日常活動の中でも必要に応じて生徒自らがP4Cを用いた対話を推進することに繋がっている。しかし、P4Cを活用することが目的にならないようにする必要がある。 ウ 生徒指導の実態から、年度末に小中合同で「スマナー向上サミット」を実施した。これまでの自らの公共の間での振る舞いや行動を振り返り、望ましい姿や改善すべき姿と行動を洗い出した。次年度も継続して小中合同で学びの場を設定し、児童生徒の態度などの変化につなげる。また、保護者と教職員向け、SSWによる講演会を設定し、思春期の子どもへの寄り添い方について具体的な関わり方や声掛けを提示してもらい理解を深めた。	A	・家庭での学習端末の使用状況について、保護者が十分に把握しきれていない様子がある。学校からの学習端末を用いた学習課題の提出の仕方、行事の際の係生徒の連絡ツールとしての使い方、その発信時間等をNEXT GIGAのタイミングで再確認してほしい。	・MTを廃止する。理由としては、改訂される学習指導要領で思考力・判断力を育むための「主体的・対話的で深い学び」を育成することから、各教科の本来の進度を大切に、各教科のタイミングで基礎・基本の評価を行う場面を設ける。それに伴い、校時表を見直し、清掃時間の確実な取組みや、BTにおける評価、実施の方法などを再考する。 ・附中生が他者との対話をより充実させ、かつ社会の一員としての自覚をもたせるための働きかけ、活動の仕組みを意図的に行っていく。 ・「いじめは絶対に許さない」という教員の姿勢と構え、「いじめへの捉え、認識」について生徒と教員が理解を深め、いじめ撲滅を目指す。 ・生徒指導への構えについて、職員研修などを通して、しっかりと足並みをそろえ予防的生徒指導を実行する。
【教育研究を推進する学校として】 ○新しい時代に求められる教育及び、公立校のニーズに合った教育研究の推進	ア 公立校のニーズを踏まえた教育研究発表会等の実施 市や県の中教研、新潟市教育委員会、全附連とより一層の連携を行い、休日開催における研究発表会実績の分析。 イ 研究の成果を発信する。 研究会での実践資料の配付、HP等での研究成果の配信。研究まとめの書籍発行を視野に入れた省察。	A	ア 研究会の開催日程について、新たな試みを行った。参加者は昨年度より多く、新潟市内の教員参加者が増加した。また、新潟大学学生の参加も昨年度より上回った。大学や、大学指導者との研究会参加への連携が図れたことが成果として考えられる。 イ 今年度研究会では、昨年度の公開授業の実践・省察を全教科でまとめ「研究集録」として参加者に配付した。職員の現状から、書籍発行までには至らないまでも、研究のまとめ方、その発信タイミング、授業提案の仕方など、職員の実態と現状、参加者のニーズに合わせた内容にする課題が残る。	A	ア 次年度は研究会の実施日時を従来の平日開催へ戻し、保護者の協力については継続して得ながら進める方向である。また、特別支援学校との交流の一環で研究会へ学習成果発表を依頼したが、参加者からも大好評であることから、連携して進めていきたい。 イ 教員の業務負担増にならない加減で、チャレンジをする。	A	・教職員の負担にならないように、資料作りや発信方法について、より工夫してほしい。	・令和8年度の研究会の参加者実績を丁寧に分析し、研究会の在り方を検討していきたい。
【教員養成を行う学校として】 ○成果の上がる教育実習 ○教育学部、教職大学院との連携 ○教育委員会及び公立校への研修協力	【具体的評価項目】 ア 教育学部、教職大学院、他大学、他校の講座を担当 担当講座数や研修会講師派遣者数及び授業研究助言者数 イ 教育実習において、実習生がICTを活用できる等新たな工夫をし、事後アンケートにおける肯定的な評価が8割以上。	A	ア 現時点で、新潟大学教育学部の講座を昨年同様の講座を担当している。 イ 今年度は教育実習生のICTを活用した授業をスムーズに実践することができた。実際に機器を用いて授業をすることのメリットを確認できた一方で、授業の目的やねらいに立ち返り授業を省察したことで、指導教員も学びを深めることができた。	A	ア 大学の教授からも教育学部に留まらず、他学部、他大学からの刺激を受け、研究の推進に役立っている。 イ iPadが教育に導入されてから、その活用や生徒の活用スキルは一時に向上した。その一方で、課題を見直し活用の在り方を再検討する段階にきている。教職員で学習場面での使い方と、特別活動などでの使い方について、しっかりと共通の認識をもちNEXT GIGAの推進を図る。	A	・読書への親しみを今一度、振り返ってみてもよい。	・次年度も積極的に各種講座、研修等の講師等を務めていきたい。全職員が、講師経験が積めるようにバランスを図りながら、教師自身の力量形成の機会とする。 ・教育実習生にも学びの機会として、研究会への参加を積極的に促していきたい。 ・NEXT GIGAに対応して、情報を教職員間で共有し、これまでの課題と今後の方策を検討していきたい。